あきる野市を明日に導く

市内には、その道に熟達した技を持つ方や職人が多くいます。
ここでは、正月にふさわしい物づくりをしている方を中心に、匠の技といえる８人と作品を紹介します。
※氏名、住所などを省略しています。

2009 匠の技

たも網

鮎などの魚釣りに用いるたも網作りは、材料となる「かやの木」探しから始まる。手で持つ部分には、キラリと光るあわびの貝殻をはめ込む。漆を何回も塗って網を張る。使うのがもったいないのでは、と思えるほど美しいつやが出る。

わら細工

天日干しした、地元産のもち米の稲穂を使う。はさみと霧吹きだけで作り上げていく。作業途中での作り直しは形がくずれてしまうので、注意がいる。お飾りは30分ほどでできてしまうが、宝船は、１日以上かかる。

だるま

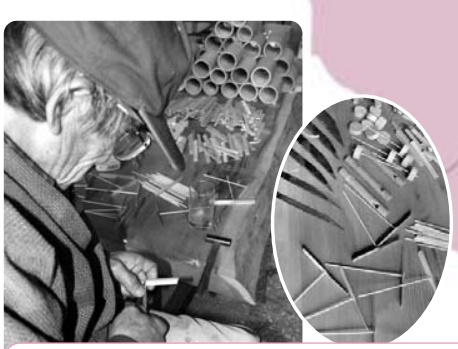
幕末、明治の初頭から始まり、受け継いで４代目のだるま職人。大きくて重いだるまを片手で持って描く作業があるため、左手の指には大きなたこがある。だるまは、木型に和紙を貼る、干す、彩色など15から20工程を経て完成させる。塗料の濃度に注意を払い、熟練技と集中力で顔を描く。

ホエの「鏡」「スタンド」

コンパクトな折りたたみの鏡は、たたんだとき、木と木の隙間がほとんどないほどぴったり。木の材料も乾燥の度合いが適したものを選ぶ熟練の目が必要。スタンドに施された彫刻の細かさは見るものをくぎ付けにする。

水引（正月飾り）

稲穂がついたわらの仕入れにはこだわりがある。鉄砲のりで次々に仕上げていく。左右や全体のバランスが大事。熟練した手ですばやく整え、大量に作り上げていく。



竹とんぼ

羽の重さのバランスをとると、まっすぐに飛ぶ。ナイフで羽を削るスピードと手つきがあざやか。今までに４万５千個くらい作ったという。１個２分程度で作ってしまう。削った面は、やすりをかけたかのようにつるつる。竹とんぼのほかに、こまと笛も作る。

黒八丈

泥染めの絹織物。材料は、ヤシャ（植物の実）と鉄分の多い泥。地質がすぐれた五日市で、昔盛んに作られていたものを20年ほど前に復活させた。秋川の浅瀬と流れも、染めた泥を落とすのに適している。

神酒（みき）の口

正月に神棚などに供えるお神酒徳利にさして飾る竹細工。子どものころから作って、60年以上になる。真竹に刃物で細かく薄く切れ目を入れて裂いていく。薄さを均等に、素早く刃を入れる技は熟練しないとできない。形を作るため、糸での固定もきつくしないとゆるんで形がくずれてしまうというが、簡単そうに片手と口を使って結んでしまう。